

■ジョウゼフ・コンラッド協会(英国) 第43回大会

伊藤正範

2017年7月7日から9日までロンドンで開催された The 43rd Annual Conference of the Joseph Conrad Society (UK)に出席した。私にとっては英国コンラッド協会の大会に参加するのはこれが初めてである。ちょうど *The Conradian* の新刊に拙論が掲載されたというタイミングも重なり、到着早々の受付では編集主幹の Allan Simmons 氏に歓迎していただいた。

レイヴンズコート・パーク近くの POSK (ポーランド社会文化協会) を会場として行われた1日目は、「“Heart of Darkness” 再訪」と「語りの諸相」を標題として掲げた2セッションにて計6本の研究発表が行われた。一見するとコンラッド研究における伝統的な主題を扱いながらも、新しい切り口から分析に取り組もうとする試みが目立ち、特に第2セッションにおける *Typhoon* や *Lord Jim* における「沈黙」に注目する発表や、“Freya of the Seven Isles”の「オペラの構造」に着目する発表には刺激を受けた。

1日目のスケジュールの終わりには、POSKの一室 Conrad Room でのワインレセプションがあり、その後、同じ建物内にある Lowiczanca Restaurant に移動して、他の参加者たちとディナーを楽しんだ。初参加ではあったが、話題の絶えない和気藹々とした時間を過ごすことができた。



1日目ディナー前の *Vin d'honneur* に向かう参加者たち。会場は POSK の Conrad Room で、部屋の中の書棚には日本を含む各国のコンラッド関連文献が並ぶ。

2日目は、11月の日本コンラッド協会第3回全国大会(於東京女子医科大学)に招待発表者として登壇予定の Richard Ambrosini 氏の発表があった。“The Lagoon”から *The Nigger of the “Narcissus”* を経て “Karain”に至るまで

の Conrad の語りの技法の発展を読み解く試みで、その先にある“*Youth*”の Marlow-narrative へと繋がっていく道筋が精緻に示されていた。第 3 セッションは“*Spectral Conrad*”と題されたパネルで、ポーランドの研究者たちが目下取り組んでいるという共同プロジェクトの最新成果が披露された。Conrad と“*spectrality*”をテーマとして、ポーランド文学におけるロマン主義、あるいはモダニズム的伝統の線上にコンラッドを位置づけようとする意欲的な研究であった。その後は、Peter Villiers 氏による *Under Western Eyes* をベースにした寸劇“*Betrayal*”が上演され、協会メンバーが演じる登場人物たちの巧みな台詞まわしを楽しんだ。この日の最後は、Robert Hampson 氏による講演で締めくくられた。*The Secret Agent* を border-crossing の物語として読むことによって Conrad 自身のヨーロッパ観に内在する軋轢をあぶり出そうとする試みであった。この日は、Ambrosini 氏や Hampson 氏のようなベテラン研究者たちが、長年の取り組みの中でしっかりと熟成させてきた研究成果を披露しているのが印象に残った。



2 日目のアフタヌーンティー後に行われた寸劇“*Betrayal*”。左奥で寝そべっているのは Haldin を演じる Hugh Epstein 氏。3 日間にわたって大会運営に忙しく走り回っておられたが、決して疲れて横になっているわけではない。

3 日目は会場をハイド・パークの傍らに位置する University Women’s Club の一室に移して行われた。“*Constructing Identity*”と題された第 1 セッションでは日本コンラッド協会の前会長と前々会長が揃い踏みし、日本のコンラッド研究が精力的に率いられていることを会場に示す形となった。岩清水由美子氏からは、*Victory* の登場人物 Schomberg の男性性にまつわる論考が、ケンブリッジ大学クレア・ホールに客員フェローとして滞在中の奥田洋子氏からは *Nostromo* におけるアイデンティティ形成にまつわる論考が提示され、いずれも活発な質疑応答へと結びついていった。その後はヒ

一スロー発の帰国便の時間を気にしながらの出席となったが、第2セッションの Ayse Deniz Temiz 氏による発表は *Victory* の Heyst の禁欲的な人生観の背後に、ポーランド出身の哲学者 Schopenhauer の影響を読み取るもので、鋭い洞察と精緻な分析に基づく好論であった。また、Remy Arab-Fuentes 氏による発表は、*Almayer's Folly* や *The Secret Agent* における genealogy の非直線性を考察したものであり、今回についてはテキスト分析に終始していたものの、複雑な系譜を抱える Conrad 自身のバックグラウンドに今後どのように踏み込んでいくのか、発展性が楽しい研究であった。両名ともまだキャリアのスタート地点に立ったばかりの若手であるが、これからのコ



最終日第1発表を務めた岩清水氏。



発表する奥田氏。会場となっているのは University Women's Club の一室。

ンラッド研究を牽引していく研究者として注目したい。

3日間の会期を通して、若手からベテランに至るまで、それぞれの世代の研究者たちが各々のなすべきことにしっかりと取り組んでいる姿を見ることができ、コンラッド研究のまさに genealogy を感じさせてくれる素晴らしい大会であった。

(いとう まさのり 関西学院大学 教授)